

## 抄 録

### ● 所謂木様蜂窩織炎ニ就テ

(Beiträge für Dermatologie u. Syphilis  
— Festschrift gewidmet Herrn Hofrat  
Dr. Neumann, 1900).

チアリー Cehiani 氏ハ先ヅレクルス氏ニ從ヘバ

木様蜂窩織炎 (Holzphlegmone) トハ多クハ顎部

ニ發スル硬固ナル丁恰モ木ノ如キ一種ノ蜂窩織

炎ニシテ聲門水腫ノ爲メニ死亡セシ一例ヲ除ク

外ハ通常徐々ニ治癒ニ就ク者ナルコトヲ叙シ次

テ自家ノ實驗セル一例テ報告セリ氏ノ患者ハ五

十歳ノ婦人ニシテ數月ノ間ニ疼痛及發熱無クシ

テ下顎地平枝部ヨリ硬結ヲ始メ次デ其硬結ハ全

頸部及胸部ニ蔓延シ化膿スル丁無ク其狀恰モ慢性皮膚炎若クハ肉腫性浸潤ノ如ク斯クテ該病機

ハ終ニ縱隔膜ヲ侵シ患者ハ肋膜炎ノ爲メニ斃レ

タリ顯微鏡的ノ検査ニ據レバ其病變ハ皮膚及皮

下脂肪組織ノ慢性炎症ニシテ其中ニハグラーム

氏法ニ由リ脫色セザル一種ノ連鎖狀球菌ヲ發見

セリト云フ (南溪生抄)

### ● 外陰部ノ原發性實布埤里

(Deutsche med. Wochenschr. 1900, Nr.

12.)

ブルノー、リュック Bruno Lück 氏ハ本題ニ就テ

報告シテ曰ク十六歳ノ女子全身ノ病感、發熱及

脈搏亢進ト共ニ外陰部ニ甚ダ疼痛性ノ腫脹ヲ來

シ小陰唇ノ内面左右同一部ニ灰白黃色ニノ壞疽

性組織ヨリ成レル被膜ヲ附着シ之ヲ剝離スルニ  
 粘膜ハ潰瘍狀ヲ呈セリ依テ被膜ノ一小部ヲ取り  
 レフロル氏血清培養基ニ移植セシニ次日ニ至リ  
 實布埤里菌ノ純粹培養ヲ得タリ然レモ該患者ノ  
 咽頭及鼻腔其他何レノ部分ニモ實布埤里菌ヲ證  
 明スルヲ能ハズ斯クテ患者ニハ二回實布埤里血  
 清ヲ注射シ局部ニハ一・五%醋酸礬土水ノ捲法ヲ  
 施シタルニ熱ノ下降スルト共ニ被膜消散シ三十  
 四日ニシテ全治セリト (南溪生抄)

●白癬ノふるをるまりん療法

(Woenko medicin. Journal. 1900, März.)

デミドウ Denidow 氏ハ白癬ヲ療スルニ痂皮ヲ  
 去リタル後患部ニ五乃至十%ノふるをるまりん液  
 ヲ塗擦シ半絹布及綿花ヲ以テ固ク頭部ニ縋帶ヲ

(抄録)

施ス塗擦後ハ通常皮膚發赤及灼感ヲ來スモ此療  
 法ニ據レバ痂皮ハ速カニ消失シ皮膚ハ普通ノ外  
 觀ヲ呈シ毛髮亦新生シ再發スルヲ無シ屢々再發  
 シタル頑固ノ症ニシテ拔毛法ヲ施シタルモ其効  
 ナキモノニ此法ヲ用井タルニ二十四日ニシテ治癒  
 セリト著者ハふるをるまりんノ白癬ニ對シ奏効確  
 實ナルヲテ説明シテ曰クふるをるまりんハ消毒殺  
 菌ノ効強クシテ而カモ其効力ハ能ク皮膚ノ深部  
 ニ透徹スルニ因ルモノナリト (南溪生抄)

●頬粘膜ニ於ケル皮脂腺ノ存

在ニ就テ

(Deutsch. med. Wochenschr. 1900.

Nr. 52.)

ウエムルブリンスキー W. Lublinski 氏ハ數回頬

粘膜ヨリ帶黃色ノ小片ヲ切除シ顯微的検査ヲ行  
 ヒタルニアウドリー及デルバンコ氏が曾テ頰粘  
 膜内ニ發見シタル皮脂腺ノ存在ヲ證明セリ氏ノ  
 説ニヨレバ該腺ハ殊ニ水銀、亞爾個保爾及煙草  
 ニ因ル消化不良ノ患者並ニ糖尿病及痛風患者ニ  
 許多存在スト (南溪生抄)

## ● 丹 毒 治 驗

(中外醫事新報、第五百五號)

醫學士阿波加准二氏ハ先ツ從來丹毒ニ使用セラ  
 レタル種々ノ療法ヲ列叙シ次デウオルフ氏が曾  
 テ丹毒ヲ患フル初生兒ノ百方効ナキモノニ二%  
 くれとりん溶液ヲ試用シテ神速ノ効ヲ収メ得タ  
 ルヲ叙シ氏ハ二十二歳ノ重症丹毒患者(頸部、  
 顔面、臀部ノ一部ヲ除クノ外殆ンド全身ニ嶋嶼狀

ニ發シタルモノ)ニウオルフ氏法ニ據リくれと  
 りんヲ試用シテ卓効ヲ獲タルコトヲ報告セリ但  
 シ著者ノ用井タルくれさりんハ四%ノ溶液ニシ  
 テ之ヲ患部ニ塗布シ硼酸綿紗ヲ以テ之ヲ被覆シ  
 縋帶ヲ施シタルニ翌日ニ至リ体温頗ル减退シ全  
 身及尻所ノ症狀共ニ驚クベキ佳况ヲ呈シ殊ニ最  
 モ患者ヲ苦メタル頸部ノ潰瘍面ハ著シク乾燥シ  
 一見昨日トハ大ニ其觀ヲ異ニシ斯クテ入院後十  
 八日ニシテ全治退院セリト云フ (南溪生抄)



## 漫 録

### ● 醫療上に關する民俗的迷信

睡 虎

迷信なるものは極端なる信仰也、換言すれば、諸般の外界事物に對して、自己の想像を逞ふし好んで架空の理を附し以て自ら信するにあて。迷信惑俗の事蹟は既に太古の史蹟に徴せ可く、時世の變遷と共に多少の推移を表せりと雖も、尙滔々として幾多の人心を蕩搖せり、社會物質的の進歩、憲章儀文の燦然と以て泰西諸國を駕するに足るとおぼす我邦に於て、しかも二十世紀の劈頭に於て、尙荒誕無稽の流言蜚語と信ずる者あるは怪しからずや、彼の矇昧無智の野蠻諸

國若くは半開諸國の民俗は兎もあれ、苟くも日進月歩の文明國、況んや多少の學識あり才智ある人士に於て、尙這般の迷信俗説を信じ且之と實行しつゝあるは、寧ろ頑迷と云へざる可からず。

崇拜と宗教との關係は猶唇齒輔車の如し、世界万国孰れの國に於ても宗教を有せざるはなく隨て又崇拜的觀念が民心を總括感化するに偉大の勢力を有するの事實也。我邦に於ても現今宗教の性質を有する、神道、佛教、基督教の三種あり、此等の中には又無數なる異類の宗派を分ち甚だ尨雜と極む、若し世界万国に於て嘗み一種族若くは一國民が各々其信ぜる處の宗教と捉へ來らば、如何に雜多なるかと推察するに足らむ。

宗教の種類雜多なるに従ひ崇拜の種類も亦絶だ

多し。日月星辰、山川池沼、等の天然なる固形物より、水火風雲電雷等の天然の變化現象を崇拜する者あり、之と天然崇拜と云ふ。

動植物と崇拜して之に神事するものあり、狐狼熊蛇、杉檜銀杏樹等各國土と生物との如何による大神外道(山口邊)人狐(出雲)熊(アイヌ)崇拜に於るが如し、之を動物崇拜といふ。彼の宮城野なる大銀杏樹は之を銀杏老母大神と稱し乳を祈るの事實あり、之れ植物崇拜也

木片石塊、神符御洗米等を以て、魔力の宿れる神化の代表者と崇むる者あり、之を物体崇拜となす。

此他魂魄崇拜、祖先崇拜、偶像崇拜、生殖器崇拜等あり有形無形に關らむ各々自己が想像を以て崇拜の材料と爲し、謂へらく此等は神力の宿

る處にして禍福を人に及ぼし得るものなりと、即ち之を祈祭し之に依て自己の願望を達せんとす。之れ極端ある信仰也、所謂迷信なるもの也、凡て民間には信仰的習慣を有す、其構成に關する研究は寧ろ宗教界の問題あり、故に余は只載籍上の所見を輯め、其醫學上に多少の關係を有するもの耳お就て見解を下さんとす。古人曰ふ、牛溲馬勃敗鼓の皮も良醫の収めて良藥と爲すと妄りに學理に照し單に迷信の語を以て一笑し去るは大早計に非ずや、宇宙の眞理は人智の悉し得る處にあらず、迷信の中豈に合理的の事實なきに限らんや。

崇拜を構成するは、主として教育なく、文化なき一般民俗の精神的素質が其崇拜とべき材料を作り、之に對して過度の信仰を恣よし、敢て判

斷と考慮とを須みず、又其天然の精神的との別を明しせず、其理非曲直をも辨せず、己が曾て創意或は傳聞せし處を曲解し、以て之と活動せしむるあり。

神佛の威力を藉りて自己の願望を達せんとするは吾人が日常聞睹するところ、就中疾病平癒の祈願に至りては、文化未だ洽からず、醫業の事尙興らざる僻俚の山村海濱の民俗のみ止らず、首都を以て誇れる輦轂の下、多少教育ある人士の好んで爲す處あり、家に財賚余りあり、一歩門と出れば名醫良藥求むるに勞なき都市に於て這般の擧あるは何ぞや、彼等は疾病と以て醫業の良く治療し得可きものたるを知らざるに非ず而かも瀰久の疾患に至りては之を人力の能くし能ふ處にあらずとなし、醫と謝絶し、藥劑と放

擲し、以て神佛に祈願するに至る、蓋し天然以外の力、即ち萬能の威力自在なりと信ずる神佛の救護を請ふて其平癒を求めんとするの依頼心に驅られし也。

彼等は神佛の前は蹲踞し、拍手禮拜し、或は口づから或は木札紙片に手書して其願意を表し、特に年齢姓父と姓名を署して他人に誤り及ぼらんことと希ひ、或は白米金錢食品を供して神佛の好意を求め、或は一切の嗜好品及び必需品と斷ち苦行禁欲して其懇憐同情を乞ひ、甚しきは日限と期して其願意を満足せしめられんことを強請し、或は豫め謝恩の供物を賭して祈願す、此の如くにして僥倖にも、偶然も己か願ひし處を満足するに迫んでや、或は祠堂を修造し、鳥居、旗幟、提灯、燈籠、額面等を献じ御酒を

供し旺んに供物を捧げて以て奉謝の意を彰す。神佛に祈願して平癒を求むる疾病は、各々神佛の性質如何に關す、特に其著明なるは、一般の疾病平癒に向てハ藥師、大日如來、流行病及び眼病と不動尊、安産泌乳成長懷妊及齒牙の疾病ハ、山神、子安觀音、子育觀音、鬼子母神に、中風、齒痛、皮膚病、避妊懷妊は地藏尊ハ、梅毒下疳淋疾等の生殖器病ハ河濯に、疣贅ハ蛸藥師ハ、流行性傳染病ハ至りてハ一定の神を限らずして明神帝釋天ハ、就中痘瘡虎列刺ハ不動尊ハ禱る、八雲、八坂の二社ハ疫病排除の神ト崇めらる。

以上は只疾病を限れる一例而已、其他ハ疾病ハ氏神に祈り、又災厄保護及ハ福利増進の要求ハ至りては、人々各其需要如何ハよりて、之を諸

種の神佛に祈願するは數ふるに違あらず。

生殖器病の爲ハ生殖器の偶像又は其畫像ト崇拜する所謂生殖器崇拜なるものは、嘗に古代の希臘、今代の印度に於けるのみならず、古より運命開發の神とし、現ハ我邦九州四國中國關東奥羽ヨリ殆ど全國舉げて尙遊廓ハは遊客の多かふんことを祈り、商業繁昌ト望む爲に崇拜しつゝあるの實証を聞けり。

醫學に各科ト類ツガ如ク、民俗が疾病治療の祈願をなすもの皆各々疾病の性質によりて、神佛の種類を異にするは奇からずヤ、蓋し此等諸神佛の能力ト能ク超天然的の妙力を有し、一ハ民俗希望の表象トありて、各疾病治療の靈驗を垂下し給ふトナす也。

疾病豫防の神トシテまた一種の英雄崇拜行ハる

素盞雄尊、素民將來、鎮西八郎、元三大師、鐘  
馮、等が流行病豫防の妙力ありとし、其畫像姓  
名を書して之と門戸に貼附し、又弘法大師の眼  
病に聖德太子の疾病に於ける守護神として祟拜  
せらるゝあり、之を人物崇拜とも云ふ可きか。  
生靈、死靈、天狗、狐狸、人狐、大神、外道、  
惡魔等が皆不可思議の神通力と有し、或は人お  
憑り移り、或は神巫に役せられて崇とみそのの  
信仰あり、之れ動物崇拜の結果にして、精神病  
學上、憑依妄想此材料たること屢あり。又靈鬼  
の信仰は旺んよ行われ、風の神、疱瘡神、傷寒  
神などと稱へ藁にて形れる人体狀のものが往々  
衢路又ハ河中に遺棄せられつゝあるは吾人の數  
々目撃せる所也。

之お由て是を觀れば、凡百の祈願動機たるべき

疾病ハ流行性ハ急性傳染病を除くの外は、概ね  
慢性の疾患にして、又其比較的眼科産婦人科  
的疾患を多しとす、而して創傷等の外科的又は  
普通の内科的疾患の少きは何ぞや、謂ふハ慢性  
疾患たるや、醫業の功顯はる、こと遅く、産科  
婦人科的疾患は羞耻の念お驅られて、醫の診按  
を請ふハ躊躇するお基き、生殖器疾患ハ秘密を  
旨とするが爲に、流行病は疫神の崇によると爲  
すが故ならむ、眼病の如きも家屋の構造、煤烟  
不潔ある生活等の害因たるを覺らざるが爲に通  
常醫師の容易お治療し能はざりしよ由るなら  
む。

人智未だ聞けざる艸昧の世に在りてハ、疾病を  
以て神佛の譴罰とみし、偏お祈禱報謝懺悔を以  
て優お罪業を拂拭し、災厄を免れ、更お靈ある

功德と垂加し得るものと迷信し、其苦患を免れんが爲め、心此趨く所、自然に神佛を祈りて其災害の輕からんを願ひし也。

疾病治癒の目的として、禁厭咒法亦旺んよ行とる、之れ各地方乃風俗人情習慣に由り、多少歴史的一遺物迷信の一生産物として、今に至るも尙流布しつゝあるなり、而して禁厭の醫療上に關する來歴は、實に醫術の沿革に伴へり。

神代記一の卷に曰く、

「大己貴命與少彥名命戮力一心經營天下復爲顯見蒼生及畜產則定其療病之方又爲攘鳥獸昆虫之災異則定其禁厭之法見以百姓至今咸蒙恩賴云々蓋振古之民茹草飲水采菓實食樹木之芽時疾病毒傷之害於是此二神乃教民勸農事播種五穀令民知所避就且定其療病方術也」と逸たる上古既ち禁

厭の法を定め療病の方と爲し、又毒傷の害を避けたり、中古お下りては僧尼の醫術を玩ぶ者甚だ多かりき、續日本紀に「養老元年詔僧尼依佛持神咒救病徒施湯藥而療瘡疾於令聽之」と記せり、紀元一千三百九十五年(聖武天皇天平七年)春筑紫より痘瘡創めて傳來し夏を經、秋冬を涉て止まざ、上公卿より下庶人に至まで之が爲に天折する者多し、醫師亦其療術を知らざ、帝即ち諸國の神社に奉幣使と立られ、諸寺の高僧に秘法の祈禱を修せしめられし事ありき、之よ由て見れば咒法禁厭此法は醫術の療する能はざるを補ひしなむ、此等此時代に在ては、病因を説くよ方り概ね妖鬼飲食の二に歸し、祈禱神咒を以て治する者は皆妖鬼より來れりとなし、他は飲食よ原由すとなせり、而して痘は神あて、

瘧又鬼ありとし之を鬼病と名け、精神的疾患と以て物の怪と唱へ、冤魂鬼魅の所爲とし、之を治するお祈禱祭攘を以て先とし、薬治之に次げり、之れ幽鬼崇拜又外ならず、古昔典藥寮に咒禁師、咒禁生、咒禁博士の名あるを見るも亦蓋し咒法禁厭を以て治病の一助となせり、故お醫學と咒祝との區別劃然たらざりしを以て、巫醫の名をさへ得るに至りし也、之れ専ら敬神の風俗として世々傳説し極めて單純なりしと雖も、佛敎の渡來せしより以降之種々の惑信と混じ、詭説を加へ、近世に至るまで、舊株を確守して闡明する所なありき、徳川氏勃興し、世乱を戡定し天下の醫人を鼓動し醫風を一新せりと雖も其説動もすれば、陰陽運氣の空理は拘束せられしものも無きお非ざりき。

(漫録)

此他尙祈禱、卜筮、守符、忌事等に關する民間信仰の俗説は到る所として流布せざるはあし、一々之を集録し得可からざ、故に只療病的二三の例に就て臆想を加ふる而已。

(吃逆) 冷水お寺の字を三遍書く爲して三口に飲む。

茶碗の上に箸一本渡し三口に飲む。

白砂糖を沸湯に攪き立て、飲む。

紙で小縷を拵へ鼻孔と輕摩と。

右手の示指中指の尖端と揃へ直に左側乳房の上へ押しつけ暫時呼吸を止むれと治す。

凡て吃逆の發する時は、水又は湯を飲み或は一呼吸を中止すれば、屢之と止め得るは吾人の曾て實驗せし所なり、必ぞしも寺の字と三遍書き、或之箸と渡し、乳房に指を壓しつけ、或は

三口は飲まざれば功あきにあらず、然るに殊更に如斯く行ふこれ、禁厭の禁厭たる所以にして、又所謂迷信の迷信たる所以なり、是等は幾

分か治療的眞理を含蓄するや論みし、而して之に附加するに禁厭的の虚構と粉飾とを以てて、故に強ち悖理の妄言のみとは評し難し。

(衄血) 紙を八板み折て汲始の水に浸し頭の上  
に載す。

棕櫚箒の尖端を切て血の出る穴へ差込む。

紙を水に浸し頭上へ載せるは、冷頭の目的より行ひしならむ、必せしも紙を八板に折て汲始の水に浸すの要なし、又安静に不斷鼻孔を填塞する時他術を施さるも血塞を形成して止血することあり、何ぞ必ずしも棕櫚箒の尖端を用ふるに限らむ、紙片可あり、綿球可あり、布巾可

あり、只填塞を要とするのみ。

其他眼疾に水浴と行ふが如きの醫療上の意味に於て、絶對的不合理とは認むる能はざ。

「兒童天死せし後次子を得んと欲せば常に死兒の墳墓に參詣すべし」と云ひ、或は産後よ合せ鏡と高聲と禁ず、等々多少婦人の健康を進め、産後の過勞を戒しめ、或は肺勞等の慢性病者が神佛に日參する等は、衛生上の關係を含むものゝ如し。

尙自然の經驗より、或は他物と肖似せるか、或は形狀の類似より、或は語音の通ずるより、種々の迷信的禁厭を見る、或は反之全然其意味關係を推掲し能はず全く不合理のものあり、然れども此等の其起原に於ては多少の根據、眞理を有せしものあらん、傳承の久しき漸々之と

轉訛謬論し、其意のある處をも推究せせ、種々臆説を加へ、事の理非を問はず、傳説的迷信を繼承し固く之を實在的現象とあして疑はず、其疾病に臨んでや、醫業恃むに足らず、只神佛の加護、禁厭咒法より由て以て萬の疾病を快癒せしむべしとぞと、愚も亦甚しうらまや、彼等ハ自己の想像と以て妄想城府と築き堅く之を廓守し、自己ハ精神作用を以て巧みに悖理の妄説を唱へ疾病禍災悉く熱誠ある信仰に由て除攘し得可しとあす、陋も亦甚しからや。勿論宗教及精神感動によりて發せる精神病、ヒステリー、の如き尙信神若くハ恐嚇等を以て治を收むるの實ありと雖も之れ只一部のみ、疾病悉く功あるに非ず、然るを彼等は之を以て萬病を根本的に快癒し得可しとあす、況んや垂死の病者を復活し以て新

生命を附與するの靈驗あると信するに至ては、迷信も亦極まれりと謂つべし。然れども、迷信の中豈眞理なしと限らんや。夫れ醫學的治療法の理論先づ起りて實驗之に次ぐものに非ず、必ずや幾多の實驗先づ積みて而後理論之より生ずる也。然れども世に之を往々思議すべからざる理外の理あり、又理論を以て説明し能はざる實驗的事實なしとせせ、彼の佛西の境ピレネテ山麓の一小邑「ル、ド」が古來萬病立るに癒ゆる不可思議の靈地として其名全世界に轟き今尙年々數千萬の病客を吸収しつゝ、あまど聞く、而して杖と彼地に洩けるものは、只熱情より出る祈禱と改悟遷善の堅き契約を爲しつゝ、純潔自然の淡水迸る岩泉と飲み、池水より浴するの外一醫業と須みずして萬病立るに快癒すとの事實あり、歐州

の名醫大家多年研究の結果之を超自然的勢力ありて不可思議の現象と呈する神秘、奇蹟をして之と學識と理論との下に嘲笑罵倒を以て葬り能はざるものとみせり。事若し信ならんか、世亦不可思議の事あると知る、

○土籠此頭骨を枕の下に入れ置く(小兒不眠症)

○紅紙おて四足の馬の形と剪裁つて蓐床の下に

七夜間入れて眠らしむ(夜尿症)

○大豆を割て一片に伊の字を一片に勢の字と書

ね呑ませれば男子は左手に女子は右手に此豆

を持って生まる又單お紙に伊勢と書て産婦に嚙

ます(難産)

○胡瓜を月の數だけ買ひ裏白に姓名書判年月を

記し河童大明神宛の手書と添へて川お流す

(痔疾)

○蜘蛛の巢を疣贅よ巻き置く(疣贅)

○鎮西八郎(麻疹)久松留守(流行性感胃)鐘馗の

畫像(痘瘡)蟹の殻(マラリヤ)龜甲、人參等を

門扉に掲げ疾病豫防策とす

以上之吾人が聞睹せし二三の例のみ、此他各地

方に行ゆる、禁厭咒法の數の如きと擧げて教ふ

可からず、要するに迷信なるものは畢竟幼稚粗

野なる崇拜的觀念、宗教的意識より生ぜしもの

也、所謂極端なる信仰の結果也。

由來我邦神國を以て稱す、敬神固より道也、中

古佛教渡來してより茲より千有餘年、基督教亦現ふ

海内お蔓延す、此等宗教の感化が人心を主宰す

る偉大の勢力は、社會の秩序人意の標準を示そ

の點よ於ても、各人のお由て其心を慰め、其心

と安んじ、安心立命の法を求め、轉迷開悟の眼

を開く、功や偉なりと云ふべし、要し信仰の極端たらざるにあり、迷信たらざるにあり、約言すれば正信たるにあり。

呵東洋の文明國、世界の戰勝國、迷信の雲影未だ盡さず、今ふ於て之を排せずんば社會の進歩を奈何せむや。

## ● 修學旅行記事

Y. S. T.

醫科四年級は前例に依り三月廿九日より往復一週日の豫定にて京坂岡山福岡熊本長崎へ修學旅行と企つ今其が旅中記事を畧述せんに先づ

出發準備として全行者は二十五日第二學期試験終了し後ち引卒者なる小川教授の室に鳩集して地圖や旅行案内等と翻して行路と議した何分短

日限中に長途の旅行を成る可く安値且殘漏する所なく見物して歸らうとする事故色々の議論もあつた末お先づ

神戸に至り神戸から山陽列車にて周防徳山に至り徳山から連絡瀛船で豊前門司に渡りて門司より長崎へ至り長崎から瀛船で熊本へ廻つて熊本より福岡へ歸り福岡からと往きと全一路を経て岡山京坂を漸次見物する事に決した然し各瀛車や瀛船の時間を操り合せて見ると殆んど旅舎に宿する事の稀れである故に一二の全行者は睡眠不足より不眠症等と起す恐れなきやと眉を擡めさ人もあつたが小川教授が其所で條件として

最薄弱の全行者が耐へ得る迄豫定を實行とること

ど定められたので皆幾分か安心した次で全行者  
十二名の各旅中職務分擔を設け當撰せしに左の  
如し

同行總數十五名

總指揮官

小川 教授

顧問

岡田 講師

顧問

田中 醫員  
(次郎)

會計係

近郷 重孝

早瀬 三求

牧 良一

宿泊係

神坂 勇治

毛利 靜一

飯塚 忠男

切符係

吉江 糸太郎

渡邊 十次

記事係

井原 悟  
山崎 芳太郎

杉山 弘齋

高田 文齋

諸準備整へり二十八日午後山崎主事より旅中注  
意を與へられき

二十九日雨天

別に旅装とておけれど旅立ちと思へば何となう  
氣も靜かならむ昨夜碌々眠りもせで午前五時頃  
に起き出で、食事終へ大手町講議場に驅せ至れ  
と見送人の湯本君と先登として牧飯塚の同行者  
并ふ小川教授も早や集まられ居き次で追々諸友  
皆參つれば切符係の人を先導として六時半  
すぎ大手町を出で七時すぎ十分に停車場に着き  
待つ事少時上り列車へ徐行して來り遂に止まる

我等の急走して乗車せしに幸に一行は皆一室に  
乗車とるを得たり數分にして瀛笛一聲瀛車は進  
行を初めぬ

嗚呼思へど今を去る三十有年前迄江戶長崎  
へ旅立つと云へば生別亦死別を兼ねる思をなせ  
しと云ふ然るも今我等は一週日あて往きて歸ら  
んとす豈壯ならずや然れど暫時にせよ住み慣れ  
し地と離るゝは安き心もせず吾の獨り車窓によ  
り尾山の高樓公園の森お向て唯眩きぬ吾等今少  
時汝と別るゝよ汝若し生あらば靈あらば我等の  
長き旅路と事かく歸る日を靜よ待てよと斯く云  
ふ間も瀛車は人のうき思ひも知らず無慈悲も速  
力を高め何時しか見へずなりぬ早くも松任も經  
て美川に出で手取川の鐵橋お來たりぬ常時なれ  
ば本吉浦や釜屋の翠色も亦一層の風致なきに有

らねど降雨の爲め車窓の閉られ望むに由なかり  
き次第に瀛車の進むと共ふ雨は繁げく何地を望  
見ん様もなく徒然の餘り雑談亦は句合せなどし  
て不思議と洩らし福井邊より持參の辨當開けて  
共に美味を誇るもをかし近江路に入りて雨の小  
降となりたれど琵琶湖の眺望も近江富士さては  
石山も皆雨霧の内に包まれ吾等にと姿と見せざ  
りき京都お入りし頃は雨と大方歎みたれど瀛車  
の狭き窓よりなれば廣く見ん術もあく唯三十三  
間堂の屋根の長さと清水の高樓東西本願寺の高  
大なる伽藍を拜するより外なし大坂お着きし頃  
と黄昏にてありき同行者中おはは全所停車場前の  
ヒーロー巻煙草の電氣燈廣告に驚あれし人のあ  
りしやに見受けぬ神戸に着せしと午後八時すぎ  
下車して停車場前の待合所入り晚餐を命し共

に汚路を侵して湊川神社居留地等散歩して歸宿  
し食事終る頃にと早十一時とかりたれば又もや  
山陽列車に身を投じて神戸を發しぬ此の時雨と  
全く止みたれど名残の未だ消ゆやうす天空は墨  
汁打流せし様にて車外は全くあや目も分ち得ぬ  
眞の暗夜なれば吾は到底月の須磨や明石の風景  
も見るよよしなしと思ひあきらめ且昨夜來の眠  
り不足と瀛車の搖に身はいたく疲勞を覺へ何時  
しか眠りぬ

三十日晴

吾とふと眠と覺し四邊を見回せば霞棚引き萬象  
未だ覺めやうぬ如き中と瀛車は盛お進行して止  
まぜ諸友又覺めたる者少なし何時ならんどウー  
ル眺むれば悪くやウールは主人の眠りと共に眠  
りけん時あらぬ時なれば友を起して問とんもい

たましの業よと思ひ居る内に瀛車と止まりぬい  
そぎ首差延し窓外を眺むれと福山と書を示しあ  
りぬるに眠き目と打開に市街と遠く眺むれと福  
山城と朝日に照らされて白壁と松樹の綠葉に洩  
れ見へてうるはし、次で瀛車の進むに従ひ幾多  
の驛も經同行者も漸々眠りと覺されぬ尾の道に  
至りし頃ハ午前六時すぎなり尾の道ハ中國海邊  
の要港よして市街は余り廣からぬと船舶の出入  
繁く港内波浪穩にして運輸至便と見受けき之の  
地ハ后に大寶愛宕の二山いとけはしく時ち市街  
ハ恰も階段の様にて鐵道と高く家屋の上を走す  
る如く糸崎驛おて暫時停車しけを顔打清め口  
すゝぎなどして辨當買求め朝食なしき爾後幾多  
の驛をすぐる間は線路を大方海邊に沿ひて眺め  
いとうるこし瀬戸の大島小島は眉睫の間近く見

へ海ふり真帆片帆風を孕み女波男波の間に白鷗の浮きつ沈つ陸おと鹽田近く鹽やく茅屋の煙いと細く長く春風よなびく風致は清委明媚あるえも云ひつくしがたし次で廣島に着せしむ流石は中國唯一の大都會とて乗り換ふ人も多かりき廣島城の雲高く聳ゆるを視守りつゝ進み暫時にして宮島驛に着きぬ

驛は日本三景の一と指屈らるる巖島に最も近く呼べは答へん程にて有名の大華表干疊敷堂五重塔等遙に打望みぬ岩國まで錦帯橋を見ばやと頻りに見廻せど見得ざりしは残念徳山に着せしは午后一時すぎなり共に下車して町余歩を運へば濱邊に出でぬ舩舟は早吾等を待ち居ければ直ちに打乗りぬ汽船に運ばれて乗り移り見れば船は豊浦丸とかあのかのりて僅に百噸余りの小船なれど

其造構いとも美しく造られ三層に別たれ最上層は乗客と運動場あて椅子の配置なども巧みに我等一行は共に此所に席と占め眼を四邊に轉じぬ波静ま點々岸の白砂青松相映して艶麗なと兎角そる間に船は進み出づ一行の打集まり或は談笑し或は用意のトラムプなど取出で時と移しぬ午後六時すぎ無事に門司お着きければ上陸なし一町許にて停車場お至り待つこと一時間余にて汽車に打乗りぬ時お黄昏進む汽車の窓より眺むればゆん手の方お赤間關の市街は灯お飾られいと間近く棹さゝばとゝゝん計りに見ゆ若しも明月の照る夜などに有らば彼岸の人の面影も見得ん計りなるべけれ何時しか小倉をも經しおどは絶えて眺めおあかりし故吾と汽車にゆづれつと眠に就きぬ

三十一日晴

友にゆり起されて目覺さむれば早長崎に着きし  
事の由いそぎ身づくろいして下車すれば午前四  
時すぎなりき然ればまだ市人の樂しき夢を結び  
て現われかすと祈る頃なり腹は飢うれど朝餉求  
めん由もあかく如何せやと共に打案ずるをりか  
ゝ漸く道行く人に教へられて醫學部の所在をも  
知り心もどなくも探り行く道すがらとある飲食  
店と見出しければ戸打たゝきよび起し食事の用  
意を命を家人は驚さつゝも早用意に取あゝり間  
もなくろれも出來運び出さるにいそぎ諸共に味  
へば其美味げに顎の結び目も解けんばかりなま  
さ食事終へて愈々學校へと立出てぬ  
第五高等學校醫學部は長崎の市街を少し離れし  
野上村と云ふ所にて野山を打拓き設けられけれ

ば位置いと高く天然の眺望麗しく遠くかすかに  
は港の出船入り船と近く四圍には片田舎の風致  
を眺めて目を樂しましむるの價値に富みぬ校舎  
の構造は木造の西洋風にて我校と異りし事あり  
小川教授は我等一行の遙けく參覽に參でし事と  
告げられければ早速參觀を許され事務所の人に  
導かき追次參觀しぬ校内の有様も我校と大同小  
異ふて事々しく述へん程の事はなうりしが唯解  
剖病理などの標本の數々を見へよく陳列せられ  
ありし其が内に胎兒の一ヶ月より九ヶ月迄の各  
月の者を取調へられありしと解剖の室に昔日我  
國風として死體解剖を諸人のいたくいみきらひ  
し故に當時渡來ありし和蘭人のホンベ氏と安政  
二年に種々苦心の末に態々歐洲より取寄せたる  
人体模型は歴史的吾等になづしく感じぬ殊お其

人体模型の今は年を経て只ともかけを止むるのみふれど其巧妙驚くにまへん計りあり尙聞く所に依れば全校は四年級の人々は程離れし縣立病院の方にて主に學ばれ全校よこ三年級以下の人々のみの由三年級の人々の臨床實習と全校の裏手よ別に救療病室と設けあるめて學ぶるゝ由なりき學校の參觀終りぬれば目下新築中の縣病院に案内せられぬ病院と學校の直下一町計り隔りし所にて恰も學校の山頂に病院は山腹に設置せられし様見受けた未だ工事中なれば評する迄もあけれど構造は主も熊本福岡の病院を形られし由なりき見終て吾等學校へ歸れば全校の會議室に導かれき室は校の玄關二階にて最も眺望も富みゆ次て全校校友會よりとて我等一行に晝飯を饗せられ吾等は其の意も感じ食し終れば之れよ

り造船所并に船舶檢疫所へ案内せんと事務所の人の云はるゝに従ひ諸共に校を辭して市街の方面へ至り海岸に出で、小舟二隻を貰ひ沖へ出づれを流石に五港の一とて船舶の出入は織り合ふ様にて忙し中にも異國の黒船も多あり遙く沖にて露西亞獨逸なぐの軍艦も見受けぬ進むと一海里計にて造船所へ至り見るに其廣大なる實お驚き入りぬ當日は休日とて就業せし部の少なりしか先づ土工部より見初めしよ全部めての諸々の船舶も供用する金屬具を鑄造する由も次お木工部は全しく船舶用の木具を調製し次の鐵工部にて先きお鑄造せし金屬具を用ゐて船具を作らる由なり亦全所のドックと二個ありて六千噸迄の船は入るゝ事を得る由あり吾等の唯廣大なるお打驚く外ありき見終りて亦前の小舟に

て船舶檢疫所に至りぬ全所と造船所の對岸ありて長崎港の弓手にて市街よりと余程隔たりぬ此の時は造船所にて會せし小川教授の知己ある第五醫學部の婦人科教授櫻井氏も同道せられき早速來意と通すれば快く承諾せられて參觀を許されぬ説明も依れば先づ消毒す可き物は所の左手の待合所に入り脱衣して中央の浴室に入り入浴消毒後右手の待合所に至る而して以上の三棟に分たれ亦各消毒者の衣服携帶品等は各々指環に番號と附して渡さる様になり居りぬ別も留置所及び病院等は棟を別たれありしが皆洋風に建てられ其の結構美麗殊も留置所は眺望に富み到底拙き筆では記さん様もなかりき見終りて元の小舟にて歸路も就き居留地上陸せし頃は日は早西に傾きて鳥も歸る時なりし一行と今朝

汽車より下車して以來碌々手足と延べて休む間もなかりし故皆いたく疲れて歩む足さへどぼどぼとげに屠所の羊それにもまさんばかり然れど櫻井教授事務所の人は我等も少しにても多く所々を見せばやどの厚意も廻り々々導かるにいとほがゆく思へど云こん様もあく従ひ行く悲さ五尺の大の男が涙流さんばかりなり漸く七時頃旅舎に就きて夕食をまし入浴などせしお生きさる心持しぬ汽船出帆の時間を問合せしに頃日より正午十二時お出帆する様改正せし事の由なれば我等は急ぐ旅路なれば明日迄待ん暇もなければ終列車にて熊本に向ふ事も決しぬ食後櫻井教授と事務所の人別を告げて歸られぬ聞けば其事務員は石川縣の人とかにて永く此地に在りし由吾等を朝來多忙あるにも係らずいと懇ろ案内せ

られし事深く謝する所なり午後十時をぎ一同車  
と連ねて停車場に至り十二時三十分の列車に搭  
せり

四月一日晴

眠り勝ちあて鳥栖と云ふ乗り換へ驛に着き待ち  
合す時間の一時間余り有るに尙早けれど朝餉し  
ては如何やと云ふに一同異議なくとある家に入  
りて食事終へて待つ間に瀛車は來りたれば急ぎ  
乗り合せぬ時に午前五時をぎなりき次て九時三  
十分す池上熊本と云ふあ着き下車して見れば場  
内ふと水前寺本妙寺乃至熊本城の如き勝地は各  
何町と書き連らねある標札あり徒歩一町許野原  
を過り李花満開の茅屋を傍に見て稻家込の道と  
經て橋を渡らんとするは豪家と思はるゝ庭の櫻  
の行かふ人の袖を止め後れ勝は渡れば嘗ては其

が昔籠城して苦戦したる城の石垣右は聳ゆる下  
を縫ふて縣立舊病院を左に手取本町に至り研屋  
支店に休憩電話を借りて病院へ晝後參觀を許さ  
れよと申込み置き晝食後町を眞直に切りて白川  
よ出て市人に問ふて下る病院は川を距てゝ市と  
界す小川教授刺を通じ我等も共み招せられて二  
階に至り待つ事少時院長谷口長雄氏の懇に我等  
お迄勞を慰め茶菓を饗せたる本日移轉診察と初  
めたる日なれば雑沓する所あるべけれども充分  
に覽かれよと後各部長諸氏等の案内あれば説明  
周到我等實は深く感謝する所ありた

先づ内科室よ入る鐵管をひきて蒸氣を導き數臺  
の吸入器の直お要に應じ得夫れより眼科室下等  
病室次に浴室に至る雨狀に或は噴水狀に螺旋の  
回轉お從て水治用の湯水を射出するよ目を驚お

しぬ通常浴槽は其か傍々にあてき後上等室の供へ付けの整頓するを見賄所此煮沸蒸物等此蒸氣装置を亦洗濯室と同じく蒸氣乃力を以て器と遠心機の如く回轉して行ふと見後小兒科婦人科を経て大手術場に至る完全なる熱氣消毒器蒸留水の製造器ありて目新しき物此みなりき次で外科室病理解剖室調劑室に至る其完備驚くばかりなり

後之隨意散歩なりしを以て水前寺に我等の多くは車と驅りて急ぎぬ松杉或之小山と以て地と圍む池水清く淺く膝に達せき小學校の運動會か童女のはでに飾りしが褙かきあげて池に入り物探し居るもゆあしく小山を登りてい下り池邊をめぐれば水の湧出せる所を見る可く奇石目と驚あし翠色掬ふと禁ぜざらしむ呼へば茶あり菓子あり

り○ありて疲れを治す可く實に一度來れば轉た去る事不能しむる此勝景なりき再び車に乗りて本妙寺に至る寺之市と離るゝ八町余段下に下車し段を昇る一町程に僅に平地あり寺い人も知る如く加藤清正公を祭る所なり癩病患者數名慈悲をどて合掌するあり尙ほ石段之一町ばかり段毎ニ四尺程の石燈籠あり昇りて堂に出づ本堂は金銀と鏤め朱塗となし所々に青色と混せ堂に數十名の南無妙法蓮華經誦する聲高く大鼓の響と和す堂の傍に癩の一群を入る室ありて眉毛落る髪脱けたるが心を込めて誦するあり歸途頭を地につけて頼む癩患に一厘宛與へてた前の病は何時起つた手を出せ足を出せと醫學生丈幾分研究せられし人もあり中に之眼見ぬとて診て下さいと頼むも小氣味悪く手出もせぬ

す信心したら治癒しやうと言ひぬけ切斷癩班紋  
癩の多くの中には露さらさら癩と思はれぬも混  
せり下りて上車し古城の下を駆けぬけ鐵お鑄た  
る記念碑あるお車を下り一回すれば分捕砲まで  
垣せられたるお怖氣を生するもをかし后直に歸  
宿時恰も暮雲棚引ききたる頃なり

飯塚氏の前刻來惡寒と覺に發熱し一行に従ふ不  
能との故に神坂氏を共に殘し翌日福岡と會合す  
る事となし我等午後十二時五分發瀛車に乗すべ  
く宿を急ぎぬ

四月二日晴

午前四時とぎ福岡にお着き停車場前の旅舎に就き  
て朝餉終へて今日こそ兼て鎮西と唯一と名高  
き福岡病院を見ばやと痛む足と踏みしめつゝ行  
くと五六町計りにて東公園と云ふよ出でぬ此邊

と一体の松林おて其が中お病院の設けられ有る  
小川教授來意を通ぜらるゝと未だ時間早ければ  
院長を初め各科長の出勤なれども小使様の人  
お案内せられて參觀しぬ其構造も装置も熊本病  
院お等しけれども一般に見劣せられていたく我  
等の多年の音も聽さしに反するも望を失ひぬ早  
々辭して友の多くと宮崎神社に至る其道すがら  
元寇記念碑とて目蓮上人の銅像が未だ顔と手と  
のみ鑄られ居るを見き日蓮上人が元寇の役に何  
のゆかりありしやと一行中に絶へて知る者あら  
ざりし宮崎神社に參り拜するに宇殿は左程廣大  
よわらぬと金銀珠玉を以て鏤飾しいと嚴に麗し  
くあり正面よ敵國降伏の四字を書せし大扁額か  
ゝげられありぬ且つ鳥居の傍よ應神の帝の胎盤  
を納め奉りし由ひて記念の松樹目出度榮へぬる

を拜したりげに此地は昔し三韓の役に亦元寇の戦に名を高く轟うせし所なれば何とあうもうしく思はれぬ然れど時間に迫まれつさぬ名残りを斷ちて歸宿し中食后熊本にて後れし飯塚神坂の兩氏來るを待ちて一同門司行の列車お投じ八時すぎ亦もや豊浦丸に乗船す折悪しく出帆后風烈しく雨さへ加はりければ沖へ進むに從ひ船の動搖甚しく一行中の二三名は龍神の怒りゝ嘔吐中樞を刺戟されし人もありしやに聞けど吾は眠りすむせば不知九時すぎ徳山に着き直ちに岡山へ向ふ豫定あれど皆疲れ果てければ一宿しき

四月三日曇

午前五時すぎの急行列車に投じて徳山と出で宮島にて嚴島行の岡田講師田中助手山崎神坂近郷吉江渡邊の諸氏へ下乗し我等小川教授早瀬牧毛

利飯塚高田井原の諸氏お岡山にて待合を事としぬ糸崎邊にて小川教授か乗り合ひし隣客の大坂新聞借りて珍らしき事もがなど讀み下せば我等が待ちに待ちし學校分立の事記載しあるお皆打喜ぶと限りあし午後一時をぎ岡山へ着き直ちに學校に至るに祭日とて唯事務員の人一人のみなるに案内せられ參觀し次で棟を連ぬる病院と參觀せしむ皆休み日の事なれば助手諸氏のみなりしが懇に導かれ參觀終るぬ校内及病院の様も別して記する程おはあけれど唯何科のも標本數々陳列しありしと救療患者の多數ありしには我々に優りありぬ爾后公園をと諸人之見物お出でたれど吾の幼年の頃久しく住みて委しく知れば獨り旅舎に止まりて留守を守りき諸人は五時を浴見物を終て歸宿し食事すよし吾と親戚舊知を

訪ふて九時そぎ歸宿せしに未だ宮島にて分れし  
人々の來らず如何せしやと案するとりあら來り  
合せられけれハ打喜び嚴島の勝景など談走るを  
聞きつゝ眠りに就きぬ

四月四日晴

午前七時すぎ宮島にて分れし人々の中岡田講師  
と除き残りの人々の大坂まで會合を約束して  
我等のみ列車に投じ岡山と發せ十一時すぎ吾の  
神戸の伯父の君を訪へばやと一行に分れ二列車  
後れて午後四時すぎ大坂まで着きぬ吾と之にて  
我が和漢混合の拙き筆と収め後の難波の地を同  
し係りの山崎の君に、京の地をば高田の君に委  
ねぬ

(杉山靈舟)

午後三時の頃一行は一聲の汽笛ともお攝津の  
國大坂ハ梅田のステーションといふに着きぬこ

いと流石我邦三府の一は屈指せらるゝ都のこと  
あればいかめしく煉瓦にて立ち聳へゐたゞ旅客  
とあわたいしく下るあり上るありその夥しさな  
かゝ他所にハ見がたきばかりなり或等も互に  
忘れものすななど氣付け合ひ列車より出で棧橋  
を渡り向なる出口より出でたりこゝは片時ばか  
り休みてより徒歩にて歩き初めぬもとより我等  
の懷中もまた春めきてのどかなれど故意と道を  
知らはやどの心にて人のひく車あどいふものお  
乗らせ道を左折右屈すること大凡八九町程にし  
て病院附近の大黒屋とあん呼べる名こそめでた  
き旅館にたどり着きぬ時しも日比は關西婦人科  
學會の會日として明日と當會會員の名所縦覽日  
なれば我等も其餘澤々浴したさものと思ふ心乃  
切なれば小川教授にも其心や察し給ひけん直ち

にその運動のため同會へ予赴むかれける跡に残りし我等も思ひ／＼名所と見物せんものと出で行きぬ然れど中に足いたしおどて家に休みぬたりし向きもあり／＼り宿を出つれど街衢喧闐肩摩穀擊石室鱗鱗薨瓦比比そのさま目撃したりし我等と世人の大坂を稱して商業の中心點と呼びまたと本邦物價の變動は主として大阪の商況に關はると唱へらるゝはげし理なりと心得たり遂に天満神社中の島公園などを尋ね歸れいまでもかく小川先生にも歸せ給ひぬ早々學會の結果いあいなふんと心をどかく尋ねしよさ心苦しめ給ふなよきようなしつるとの言葉お我等と専ら先生の力に依るものと慥しきこと限なかりき時將に六時夕飯すでに調ひき然らばこれより心優に食せんものと膳の料理ふこりかゝりたり實

に命も延びん必地したる業ありける食ひ終れば例の如く静けき席の瞬の間よどよめき初しまりぬしばらくありて我等と夜のながめといましどしほどこそ思ひしまゝ道頓堀さして出でたりきこゝに大阪の中にもいとも繁盛を極め貴きと賤しきとなく男も女もみなつとどいくる所ああれとの賑はしきこと言はん方なしまいて數多の劇場櫓を並べこれお對峙して割烹店の薨を争へるはしどきと花をふしく予思はれたる我等とあちこちねり歩きしに何時しか一人二人と見失ひ三々伍々にとなれしも十時頃よとみお宿にかへりたりぬ床よ入るやみお思ふことなき様よ寢込みぬ夜半物音喧しけれと驟雨にても降りつるふんと思ひ立ち遙に戸間よと伺へど殘月皓々四隣無聲駟聲囂々百雷如落

五日 明ぬればあゝねさす日よう／＼照り渡り霞薄くたなびきたるいとどかし今日の大阪水源地を初め造幣局城内など見んものと待ちお待ちたる日のことなれば誰にやあらんとく目覺めたるものゝ起き出づればそが物音に驚かされ俄々思ひ立ちたる様にわれ先きにと口嗽ぎ顔みど洗ふもそう／＼しまづ例のこといもなし終れの時とや午前五時二十分にてありきされどく／＼梅田停車場に行かんものどて手早く用意を整へ宿を出で昨日來しかたどくりかへしステーションに着きぬ正に六時あり直ちお切符を買ひ求め乗車すれば瞬もかく瀛車は動き初めぬかくて十分も過ぎしと思ひし頃已に我等は櫻田島に着きぬこゝよりとや水源地場内に設けある煙筒より立ちのぼる黒煙を見たまき水源地に至れり事

務員の我等をてあつく案内し説明さへもなせることなれり得る所多かりぬ七時ごろ全く見つくせばいたく禮を述べて立ち去りたり

そとより安治川の渡しなる源八渡しを打越へ行くこと七町程にて造幣局へ着きぬまづ門衛に參觀せまほしき旨をつぶやかお述べればまだしも婦人科學會より照會なければそれぬる應接所にて待ちぬ給へこのことかれりそこよて煙草などいぶしぬたるになか／＼人くるけわひなければおぼつあなきなどいふものもありきさるほどに人の出でていきましも學會よりのしらせあれば案内まうさんといふいどうれし案内者に従ひ館に入れと職工はそれ／＼たのが勉むべき業をうかしけるひとときと目立ちて職工のいかめしくれごそりなるもいとつぎ／＼造幣の術についで

は巧妙といはんより外なかりき時に九時二十分ありきまた行くこと五六町あて城内に至りぬつゝいて病院學校を參觀せしと喜んで我等を迎へ茶菓さへもうけたりき物およりほむるおあらねど都人のゆゑしき心とねれしはあられていどや感じ入りぬ見終れり己一時さればほどよき所あて午飯せんものどて安常橋詰なるヒーフシヨツプに登りたりき食ひ終れと再び大黒屋より立ち歸りしに吊ひ人よもの數多めたは如何なることどのありしやと不審かしく思ひたるよあがく病み居る病人ありしか昨夜死したりしと聞けば我等は心のどけく臥居たる折しもかゝることのあるものかなど人のいふにかさへ居たる人のさし出で、無常の風之時を擇ばすといはばさちめやといふげに世の頼みなき身おしみていと

哀れなりきこれより我等は午後三時二十分大坂を後にしておなじ四時三十分頃京都へ入りぬなをこゝよあの日見しこと繰返し書きつけんもいとくどくし然れと思ふこと言せんも心あかぬ心地それば聊かもすることなしぬ

○櫻田島水源地

大坂市お設けられさる水道と明治廿五年八月始めて工と起し同廿八年十月にぞ落成し終へぬこれおつき二百五十六萬圓あまりを費やせしとなん然れどかゝる大都のことおれば衛生おつけ火災おつけ具備されたるもげに理なりと思ひぬさて水道工事のたぐひこくさくあるものおれどこゝお具へるものはハンブルクとかやいへる都になしつるも此と同じ様に思ひぬろこまづ河水を沈澱池にさりこゝに日ひとひ夜ひとよあま

りといめれき水の中にありつるよらぬものゝ澄めるのちの清らなる水を地下に備へある管を経て濾過池へぞ送くるなりそをにて濾し終たる水を更に他の管もて貯水池に貯へたきつぎにろ加水を唧筒機械の力により市中にそあへある水導管に予配つものなりといふことより淀の水とどりなしたる者おてつぎおろのさまものせんとす

取水塔は始め淀の水を引き入れんために設けられたるものにて直徑六尺の鐵管二本よりなりぬいづれも高さを異にして二つの取水口をつけそれより唧筒室の下なる吸水井へねのづと流れこましむ取水口の絶へす水と取らんにいあらず用なきときと取らずとありんため制水弁の用意ありける又塵など除うんため鐵網のろなへあ

りぬかくて一口より一分時お千四百立方尺の水と取入れ得るものとすいふ

取水唧筒の吸水井内へたし寄せるものを吸ひ上げ沈澱池へ送らんとする用とすなしぬこれにて四臺のしつらひあれどうち二臺のみ晝とあく夜とあく動きつゝいけなばいとやすくこの都お住みなせる人々のもどめに足り得べきものとなんげに一臺の一分時又吸上くる水量は七百立方尺にしてその馬力六十五あまりといふ

沈澱池の四個あていづれも長三百三十尺巾四十尺深十六尺のものなりことよまた制水弁の設けありて取水唧筒室より程近き池かか自と流れ来る水を集つめ三十六時間程澄ましれきぬろれより濾過池に連くる鐵管の入口に調らへある制水弁によりて予かしこへ流れ下るものとなしつ

濾過池は長百八十二尺巾百五十一尺深六尺九寸のいど大なる池八個よりなりぬこの池は下は荒らしくしき砂と据へそれよ上つ方とようく細なるものと用ひ作りなせるものなりここに沈澱池より流れ來し水を濾し終へば淨水井に集め次お量水池へ送くるものなり量水池の濾過地へ流れ來しいと清らなる水を送水唧筒室の下お設けある井戸よ送くる調らへありことにて貯水池お送りさる水量を量り知らるゝものあり送水唧筒の濾過せる淨水を大城城内に設けある貯水池に送らんものとて務むるものとして五臺の裝へあれどそか内一臺は不時に備へらるゝものにて日來の用ひられおありかんこれは取水唧筒にくらべなばいと力強くて何れも一分時間に押上くる水量は三百二十立方尺にしてろの馬力

凡百二十馬力ありとさゝぬ  
辨室 水源池より來れる送水管はもと二條あれどおは中おろ合して一條どあり貯水池へ入りぬまゝ貯水池より市へ連づける配水管は初め一條なれどこは分れて四條となり本幹をなしぬこれより更に數多き管に分たるこの分れぬる管と一條に引延ばしつけなば八拾五里おまりに及ぶといふかくて送水管の二條と配水管の四條とを制水瓣の開閉に従むつゝたもし分かれもし得るよう調べあり然ればさまゝ給水を調理せしめらるゝものにて非常のこゝも起きなば直ちに配水管と貯水池との道を打絶ち水源地より來れる送水管とを續けしめ得らるゝものおかんわ

貯水池は海面より百廿六尺ほど高き大坂城内お

設けられ長二百尺巾百尺深十六尺のもの三つよりなりぬこゝの水源地より來れる淨水を貯へ辨室の備へありてろれく配水さるゝ務をぞなすかりなれ温き折も寒き時水の温度を同じくなさまほしくせんとにや煉瓦石といふものにて手堅く作りおせるいと理なりまいて常盤木など植へなはいま一層よかふめと思ひぬ

### ○大阪造幣局

こは溶解部伸展部刻印部検査部おとに分れぬその様見しまゝ書きつけんにまづ溶解部にあてては金貨作らんとならば金九分に銅一分をう加へらる銀貨にありても同じ割みてうあるをを熔かして長二尺巾一寸程の四角さまある棒におしぬこの棒金よしわらば一本より何れも十圓金貨どなし三千五百圓を作り得たるゝといふまた

その金貨一個の目方二匁二分あまるとぞきく次にそか棒を伸展し送りあは巾三寸長二尺あまりの定めある厚さの薄き片板とはなしぬこれと蒸氣機械の力もて圓き形にう切りぬきけるその機械の構へはろの道あらぬば知るゝ由なれぞ先つゝた長崎造船所にて見しものと同じように思ひれぬその圓きもの刻印部あて同じたぐひの機械もて定めある印をう刻むなりかくなし終へたるものと片時ばかり爐壺にて焼くられの先に混じりたる銅は上お浮びあかりぬかゝるものと硫酸にて洗ひ去りなり硫酸銅とかいふものとなり金はれのずからまじりなきものといふありぬさしたる後といと正しき天秤よて一つくはかりためされけるこの時定めある目方より軽くは止むなく更ゝ溶解部には送りやらるゝなりこ

れお引きかへ目方少し重くはそが縁とぞ擦りへらさるかくてよくくしらすべだしたる者をば五十つ紙もて包み合せ大阪日本銀行支店へぞ送らるものなりとぞ

○大阪城

こと過ぎし天正十一年のころ豊臣秀吉公の築かれしものおして今はろの城址をのみぞ残しとむれどその構への廣びやかなるげに膽つぶるゝばかりなりとりわけいまなと石壘の間に數十間もありなん巨石を見なば昔忍ばれていとゆゑおし位置と市の東おありて上よりあたを眺むれば目のとゆうん限り見渡さるゝものにて秀吉公のこゝに住居を定め天下の政を執ることゝなしたるもさころと思ひ遣らる今こゝに第四師團司令部をすれかれける

午後四時も過ぎん頃しも京都停車場お着きぬれ心車長を初めその道の人々京都々々と呼はりぬあくと聞くだに京のあまめかしさ思ひやられて心優に此の世の外に出でたる心地ずしたりけり即ち人のひく車一つやとひ来てみな已か持てるものどものせ車の行くまゝ追ひ行けばよう／＼幸行町通り丸一と呼びつる旅館お着きぬこゝは年比知まなし宿おしあらばいと懇にとりおせり時お五時なりき吾等は例の如く膝うちまじへ口まめに煙草いぶせし煙諸共見しこと聞きしふしあるとあくなきとなく吹き出だされてげお由々しかりき然れどあか／＼に疲れ覺へたれば誰れどて立たんどもせざりきよ人の出て来て浴おみし給へと告ぐれいよう／＼これにて疲れおれさんおや立ち行きぬかくてのち夕餉などし給

れと日影暗くなると行き鳥は我り寢所へせ急きつ  
る頃どとなりぬ然らとこれより漫ろ歩たせばや  
どて出でたりしも足痛たまゝ京極祇園八阪神社  
などこのふ見すまし八時頃我り宿お歸りたり  
こゝに京都の名所ひとつもせんは理あるに似た  
れどぎようくしく人のよく知ること書き  
つけんも片腹いたく思くるゝ心地すれば省く  
ことよなしぬ

六日 空のけはひ穩かお風の清げなるいと心地  
よしまいて山際すこしあかみて物の形ようく  
明らけくなり行くさま言の葉の足るまじくも何  
ら老今日のみな我家お歸る日おあふさいとそう  
くしまづ例のことどもし終へ午前七時頃大學  
病院醫科大學あと見んものとて宿を出でたりき  
大學病院は町の東に當りて吉田とみん呼べる清

らお静けさ片田舎にす設けられぬこは先きつ方  
見し熊本福岡などの者と較べなば其大さ廣から  
ぬとよろす整ひて流石はと思ひしかども多くり  
ぬ

本館は診察所藥局などの設けあり診察所は何に  
とて書き出でんことも無し一層目引きたると藥  
局にて予あるとりわけ調劑室の前にあたり藥得  
んとする者の爲めに待ち居る室を調ひわりこは  
なかく心に心ある業と思ひぬ調劑室ハ狭まけれ  
ど所につけ丈高き瓶棚おと程よく調ひありてい  
どよし其他製煉室藥品試験室などあれど他所よ  
見し者と變はりおければ記すべき事もおし  
病室は東西の二棟に分おれ何れも三十人の患者  
を容るといふこゝに感じ入りたるは病室と清ら  
に保さん爲めよや別に食堂の調ひあり最ど惡惡

くき業と思ひぬるか外は静養室運動室の設けありたり

醫科大學ここに設立されしより日淺ければ萬事足らぬ心地するも理なり事務室生理室之本館に設けらるゝも解剖學室病理學室は形ばかりの假屋よりある然れど流石大學のことなれば器械標本おびには目新しき者もありぬ取わけ藤波教授の示し給へつる標本の作りさまは最と巧ありきうは世お作りなせるものと異様にレンス形をなせる硝子製のものお室内にて標本とす可き材料とアルコールとを充たせり此れにて組織の充血せるさま或は貧血せるなど細やかに其變化と見得られ最ぬと便よき者と思ひれたり解剖室にて鈴木教授を初め我校を卒業し給ひし久保石森両氏の務め居給まへばよく／＼案内なし

給ひぬ尙見まほしき者あれど時はや正午には及ばんとしたれば厚く禮して宿に予向ひぬあくて宿にて晝餉せん時もなければ直ちに腕車にてステーションお赴きたり瞬もなく列車着きぬれば吾等をそれに乗せられ午后一時十五分名残をどめて予京都を出でたりき今は誰れもうも旅に飽きたるにや欠伸おど流行しぬ然れど列車は倦まぬにや時と共に進み行けば何時しか北國訛の言葉も聞ゆれば最となつかしき心地ぞなしぬとかくする間に敦賀に着きぬ此の邊りは先きに行きし折は雨の降りつれば四方の景色眺めんようも無けれど今は月さへあざやかに登り出で水面最ときふめき小金と流したるばかりなり其様なか／＼に言はん方おありき斯くて列車の行くまゝ吾等もつれ行かれ午后十二時頃さわりなく

金澤に予着さぬ最とめてたし (完結)

○春五句 破 箏

外科室のストープあつき彌生哉

淡紅き昇永水や春日さす

病室に蒲團干しある日和あな

眼を病んで花見の留守や日の永き

春の夜や色情狂のうつくしき

○雑 詠 藥二生

春 野

花になく鶯の音にひかされてふみ迷ふ野に日

は暮むとす

春日漫遊

長閑さる春の野遊面白し花のいろ色鳥の聲々

櫻下 劍舞

(會報)

いさうたへ朧月夜の花陰に劍の舞は吾にゆるして

行 軍

霞しく小松か原にありけりけふり立そふ行軍の影

赤十字社看護婦

劍たちどりのあぬ身も皇くにいつくさむみちにある世ありけり

\* \* \* \* \*

食 報

●叙任及辭令

叙正七位 從七從勳六等 村 田 醇

叙從七位 正八位 田 上 涉

聖

叙從七位

正八位

本多 勝久

月俸金參拾五圓給與

監獄醫

高松 岩吉

叙從七位

正八位

市村 鐵外

(以上三月十四日)

(以上二月二十八日)

海軍中軍醫

鈴木寬之助

任陸軍三等軍醫

北川 健三

免赤城軍醫長心得補海軍兵學校附

任陸軍三等軍醫

百谷 義一

海軍兵學校附海軍中軍醫

鈴木寬之助

任陸軍三等軍醫

田中 次郎

兼筑波軍醫長心得仰付

任陸軍三等軍醫

神保 正長

(以上三月一日)

陸叙高等官四等 第四高等學校教授

小川 勝陳

任陸軍三等軍醫

齋藤 幸作

陸叙高等官五等 第四高等學校教授

金子 治郎

任陸軍三等藥劑官

田中 正一

(以上三月八日)

叙從七位

敷波重次郎

任海軍少軍醫 海軍少軍醫候補生

諸角 友平

(以上三月十一日)

村 田 醇

(以上三月十六日)

免本職補步兵第二聯隊附野戰砲兵第八聯隊附軍醫

補吳海軍病院附 海軍少軍醫

山崎清一郎

衛生局防疫課長ヲ命ス

內務技師

野田 忠廣

(以上三月二十五日)

第四高等學校教授 木村 孝藏

任陸軍三等軍醫

小林 茂樹  
竹下麗三郎

學術上取調ノ爲メ往復滞在共一週日間ノ豫定ヲ以テ上京ヲ命ス

第四高等學校教授 小川 勝陳

補歩兵第七聯隊附

陸軍三等軍醫 竹下麗三郎

醫學部醫學科四年生修學旅行ニ付出張ヲ命ス

(以上三月二十八日)

叙高等官三等 第四高等學校校長兼第四高等學校教授正六位 北條 時敬

金澤醫學專門學校長心得ヲ命ズ

(以上四月一日)  
金澤醫學專門學校教授 山 碓 幹

(以上三月二十六日)

地方衛生會委員ヲ囑託ス 第四高等學校教授醫學博士 木村 孝藏

岐阜縣福井縣へ出張ヲ命ズ  
櫻井小平太

全 上 第四高等學校教授 櫻井小平太

(以上三月二十日石川縣)

第四高等學校教授 下平 用彩

庶務掛ヲ命ス 金澤醫學專門學校助教授 松田 菊治

地方衛生會臨時委員ヲ囑託ス

(以上三月三十日石川縣)

會計掛ヲ命ス 全 上 書記 永山 一昌

生徒取締ヲ命ズ 金澤醫學專門學校助教 堤 從 清

石川縣金澤病院醫員 木下 克雄

全 全 上 全 福見常太郎

全 上 田中一次郎

全 全 上 全 宮川 爲三

金澤娼妓検査醫並石川縣金澤娼妓病院醫員兼務

(以上四月六日)

ヲ命ス 月手當金拾圓給與

雇申付 石黒 重義

(以上四月一日石川縣)

庶務掛ヲ命ス 金澤醫學專門學校雇 石黒 重義

金澤醫學專門學校教授 上田 計二

(以上四月九日)

明治三十四年度生徒身体検査醫員長ヲ命ス

金澤醫學專門學校講師 岡田 剛吉

金澤醫學專門學校教務囑託 東 良 平

依願囑託ヲ解ク

全 上 三木 三郎

金澤醫學專門學校教務囑託 小川 爲吉

全 上 田中 正一

依願囑託ヲ解ク

明治三十四年度生徒身体検査醫員ヲ命ス

(以上四月十一日)

金澤醫學專門學校助教 松田 菊治

金澤醫學專門學校教授 下平 用彩

全 上 書記 楠 正 可

石川縣金澤娼妓病院長ヲ囑託ス

全 上 雇 倉本鑄太郎

年手當金百二十圓給與

全 上 雇 石黒 重義

明治三十四年度生徒身体検査委員ヲ命ス

(以上四月十二日)

第四高等學校書記 森川 正名

全 上 吉村 政行

全 上 藤 井 鏡

兼任金澤醫學專門學校書記

金澤醫學專門學校書記 楠 正 可

兼任第四高等學校書記

(以上四月十二日)

雇申付 宇野 益三

會計掛ヲ命ス 雇 宇野 益三

(以上四月十七日)

陸軍三等軍醫正八位 森 川 修

任陸軍二等軍醫

(以上四月十八日)

叙從七位 正八位 飛見 丈俊

叙正八位 武田 正壽

(以上四月二十日)

金澤醫學專門學校助教 堤 從 清

藥學科一年生修學旅行ニ付出張ヲ命ス

(以上四月二十三日)

臺北衛戍病院附陸軍二等藥劑官 市村 鉄外

免本職補小倉衛戍病院附

熊本衛戍病院附陸軍三等藥劑官 橋本 安吉

免本職補臺北衛戍病院附

(以上四月二十二日)

任金澤醫學專門學校教授 石川 喜直

金澤醫學專門學校教授 石川 喜直

陸高等官八等 十級俸下賜

(以上五月一日)

助教授	福見常太郎	月俸金貳拾五圓給與	全	上	田中一次郎
	松田 菊治	月俸金貳拾五圓給與	全	上	木下 克雄
	宮川 爲三	月俸金貳拾五圓給與	全	上	森田 齊次
		月俸金貳拾圓給與	全	上	松田龜太郎
		月俸金貳拾圓給與	全	上	林 養輔
		月俸金貳拾圓給與	全	上	河野 勇

郵便及電信爲替受取方管理者ヲ命ス

(以上四月二十九日)

月俸金五拾圓給與 石川縣金澤病院醫員 岡田 剛吉

月俸金五拾圓給與 全 上 加藤 慶三

月俸金四拾五圓給與 全 上 森島 彦夫

月俸金四拾圓給與 全 上 津川 恒

月俸金三拾五圓給與 全 上 沖野彌一郎

月俸金三拾五圓給與 全 上 東 長平

月俸金三拾圓給與 全 上 三木 三郎

月俸金貳拾五圓給與 全 上 田中 正一

月俸金貳拾五圓給與 全 上 北川 健三

月俸金貳拾五圓給與 全 上 竹多乙三郎

(以上四月十七日石川縣)

### ●會員動靜

▲小林茂樹氏 陸軍見習醫官たりし同氏の三月廿八日陸軍三等軍醫に任じ歩兵第七聯隊附に補せられたる由

▲竹下麗三郎氏 陸軍見習醫官たりし同氏は三月廿八日陸軍三等軍醫に任じ歩兵第卅五聯隊附に補せられたる由

▲深美貞之助氏 曩も報道せしが如く三月下旬 たり

金澤病院外科第一部お入られたり

▲諸角友平氏 從來郷里に於て開業せられたる 同氏ハ此程能登宇出津お於て新も開業せられた り

▲榊原久氏 同氏は此程富山病院勤務を辞し自 宅に於て静養中ありといふ

▲小川爲吉氏 同氏ハ金澤病院眼科勤務を辞し 北海道のさる村醫を囑托せられたりといふ

▲木村教授 は三月三十一日出發上京日本外科 學會に臨席せられ四月七日歸校せられたり。教 授同會に於て宿題關節結核に就て報告せられ たりといふ

▲櫻井教授 は藥業視察として四月二日出發福 井岐阜兩縣へ向け出張せられ同九日歸校せられ

(會報)

たり

▲小川教授 と三月二十九日修學旅行として醫 學科四年生を引率し熊本、長崎、福岡、岡山地 方へ出發せられ四月六日歸校されたり尙氏は四 月下旬展墓の爲め一週間の見込を以て歸省せら れた

▲木村、佐々木兩教授 は四月十四日福井市お 於て開かれたる第二回北陸醫學會へ出席せられ 翌十五日歸校せられたり

▲東長平氏 は三月三十一日出發上京日本外科 學會に臨席せられ同七日歸澤せられたり

▲高山教授 は私用を帯び三月二十五日出發上 京四月八日歸校せられたり

▲石川氏 本校解剖學講師たると同氏ハ五月一 日教授に任じ高等官八等お叙し十級俸を給せ

る

▲吉田幡誠氏 外科介補として第一醫院に勤務せられし同氏は今回豊橋病院外科副部長兼豊橋驅梅院長として赴任せられたり

▲田中正鐸氏 は三月二十三日丹波丸お搭じ横濱を出帆し西行の途ふ上られたり

▲金子太須計氏 は眼科介補として第一醫院へ勤務せらる

▲高田範圍氏 外科介補として第一醫院へ勤務

▲濱口廣海氏 眼科研究の傍ら醫科大學病理教室にて病理學研究中

▲辻岡律氏 大學皮膚梅毒科介補を罷めて専ら吉原病院へ勤務せらる

▲淺井俊介氏 逝去 通常會員淺井俊介氏は氣管枝加答兒に冒され去る三月十三日有爲の才を懷

して長逝せられより、悲哉。

### ●醫學部の獨立

別項記載の如く明治三十四年四月一日文部省令第八號により第四高等學校醫學部を改めて金澤醫學專門學校となし第四高等學校と分離獨立せらるに至れり

### ●獨立に關して校長心得

#### よりの訓諭

四月八日午後第一時金澤醫學專門學校生徒一同と本校臨時講堂に集め校長心得山碯幹氏は諄々これに訓諭するところありたり其主旨の大略ハ先づ獨立に就て今日に於ては唯其名稱を改めたるか如たのみにして不日專門學校令の發布せらるるまでは從來の高等學校醫學部令に従ふべきこ

とより此際生徒たるものゝ専ら獨立自治の精神  
と涵養して大に校風を發輝し併せて將來の爲め  
又深く鑒みるべきこと、尙これより職員に命じ  
て大お生徒の監督又意と注あしむること等、種  
々の訓諭の後、五ヶ條の生徒心得を朗讀せられ  
たり

●分立に關する校友會の處分  
ハ兩校より各同  
數の處分委員と出し決議することゝなりしか、  
再三討議の結果遂に左の如くに決定しさり。

一校友會處分委員會ニ於テ學校分離ノ結果校  
友會ヲ全然分離スルコト、シ財産ノ分配ハ  
本月末日マデニ結了スルコトニ決セリ

二舊校友會ノ事業ハ前項財産分配結了マデ從  
來ノ通り繼續ス同會費第三期分モ從來ノ例  
ニヨリ納入スヘキモノトス

(會報)

●金澤醫學專門學校分教場 從來の醫學部臨床  
講義場を以て本校に充つると共に、舊第四高等  
學校醫學部醫學科及藥學科教場と其分教場お充  
てられたり。

●庶務掛並會計掛 目下本校に於ては舊教務  
課、學生課及び庶務課庶務掛を一括して庶務掛  
を置き、別に會計掛を從來の通りに其事務を取  
扱ふ。

●山崎校長心得此上京 山崎校長心得ハ四月二  
十二日より開會せらる醫學專門學校長會議お列  
席の爲め滞在日數約三週間の豫定にて四月十九  
日上京の途お就かれたり。

●外科室の擴張 今度外科室ハ舊婦人科室の跡  
へ其外來室を移されしと共に舊外來室は其繃帶  
交換室お充てらるゝに至れり

五



をひきて君が所見に就て辨せらる。

死〇〇〇〇就て、川端清隆君。死△△△△又就て先づ生活の養

素、現象の一般より、死の原因に論し及ぼし、醫  
聖諸家の説と参照して、必竟死は体内器關の發

育の程度と速力の調和破るゝにより起るものな  
りと論じ、仔細又君が意見を吐露せられたり。

左指の使用に就て、岡田講師。實地上醫人の頗  
る手指の運用に巧ならざるべからざるを以て、

常お一定の練習より、左指と知覺的探查を用  
ゆると良しと述べられ、特又初學者諸君に對し

て、務めて左指を觸診に應用すべく初より習慣  
すべきことと論せらる、論旨有益お語亦頗る簡

明、大に吾人の意を得たり。

„Von einem allgemeinen Gesichtspunkte der  
Infectionskrankheiten“ 米澤啓君。傳染病の云

(會報)

微機生体、蔓延及其免疫に就て君が得意の流暢  
なる獨逸語にて演述を試みたる

夢〇〇の話、金子教授。待ちに待ちたる夢〇と一月二  
十九日より三十餘日の長きを経て今日やうやく

此講話會場は結ばるゝこと、はありぬ。金子教  
授登壇、撫髯一番して徐ろく説き出すところ頗

る明快、抑揚弛張聲調爽やかに倦む色なきは、蓋  
し教授が學校及び生徒に對する希望の一般を述

べられたるものなり。教場の整理、教師の覺悟、  
生徒の責任、教授法の改良等まついて滾々止む

ことなく、直言して憚らず、四邊宛然人なきか  
如くは自己か意志を吐露すること極めて大膽、

坐ろに聴くものをして寒き心あらしめたること近

頃珍らしき快論なりき。加之教授と其間たま  
く眞面目なる諧諷を交へて愛嬌滴々、滿場の

吾

聽者をして此長時間の辯論を靜聽とべく倦むことなからしめたり。

午後九時半散會。

### ●第廿二回講話會

四月廿日午後六時内科講堂お開く。講話部委員長木村教授はある事情に依り出席せられざりしと以て小川教授代りて開會と報せらる。

肩胛骨<sup>○○○○○○○○</sup>抽出に就て、東良平君<sup>△△△△</sup>。此題お就て演せらる、筈なりしも、氏が嘗て開かれたる外科學會に臨まれたる際の道中、會場の景況、演題等を細に話され、我等又實に此會より列席し居る如き感ありき。

左側盲腸<sup>○○○○○○○○</sup>ヘルニヤ<sup>○○○○</sup>就て、北川健三君<sup>△△△△△△</sup>。盲腸の固定せらるゝことは他の腸管より強きと以て比

較的右側に於てす少く、左側之尙ほ之より稀なるを統計數を以て示し、右側より不可納性として左へ全く之を反すと、本例を切開せしお直に還納したりと云ふ。

繁殖せざる單細胞動物<sup>○○○○○○○○○○</sup>お就て、佐伯亮齋君<sup>△△△△△△</sup>。女卵之實は單細胞動物として繁殖せざるものありと論及せられたり。然れ共一旦精虫と結合すれば分裂して胎兒となる、余のもの之此結合前を指すものなりと説くこと精密。

川端清隆君<sup>△△△△△△</sup>登壇、前佐伯氏の説にて全然贊同と表する能くざるものなりと論と起し抑も卵と精虫との結合前後を區別する例の甲商店ありて乙と同盟して一大株式會社と作りたりとすれば既にお甲商店は全く消滅して株式會社の新生せしものなりとの事と大に駁し曰く、甲は滅せしあ

らすして経過中に唯其形を變せしものみりと辯  
難攻撃された。

法醫學的光線應用に就て、太田精一君。X光線  
發見以來臨床上診斷或は治療に應用せらるゝ、こ  
と多きも未だ法醫に用むし其例を見せと氏は當  
地裁判所に於ける事件のあるものゝ應用せしも  
のにして前醫師診斷書に依れば二十の創口他に  
擦過傷ありて既に十八個の彈丸を摘出せりと云  
ふ、然るに照して之と撮影せしに尙ほ六十余个  
を証明するを得たりと、終に應用の際の注意と  
述べ寫真數枚を覽み供せられたり

兄弟の說(承前)、小川教授。吾人の切望し居り  
し此題に就ての先生の既に時間の迫り居ればと  
、曾祖母、祖母、母、姉妹の一胎乃至双品胎  
せし英國もありし例と示され後降壇、閉會を告

げられたるに拍手の内遺憾の念も混じたりき。  
先米澤啓君の第三高等學校との運動競技に關  
し大に訴ふる所ありて賛同を需め閉會後も一部  
の人の残りて議する所ありき、ちなみ記を聽  
者無慮二百、流石に廣き講堂も立錫の餘地なか  
りき。

### ● 在東京會員同窓會記事

時は陽春となりて櫻花はや笑ひろめ士女は上野  
に遊び墨堤に徘徊。恰も學會の開かるゝもの續  
々として相接す、曰く日本外科學會、曰く東京  
醫學會、曰く皮膚病梅毒學會、曰く傳染病研究  
所同窓會と、爲に吾十全會員にして上京するも  
の少なからむ且つ特別會員野田忠廣氏曩きお官命  
と帯びて歐州視察の所先日無恙歸朝せられたる

により同氏を歓迎せんがため四月四日を期して第九回同窓會總會を神田三河屋に開けり、會する者歸朝者野田忠廣氏とはじめ、上京者木村孝藏、東良平、藤井伊之吉、米村吉太郎及某の五氏の外、在京同窓會員を加へて二十二名にいたれり。一同寫眞師工藤も趣きて撮影し畢りて六時開會す、當番幹事小栗君開會の辭を述べ野田、木村両氏の謝辭談話あり卓と挾で互に往事を回想して快談尽さず、終りに一同の健康と祝して散り、時正お九時あり。因り記す同窓會員中岡部元次郎君は目下東京におらき、園崎純次郎君は召集のため不在あり。(松原)

### ●皇孫御降誕祝賀式

右式は五月三日午前八時本校臨時講堂に於て施行せられたり。始式の號鈴と共に生徒一同先づ

入場、次で職員入場、各席定まるや木村本校長心得代理は徐々として登壇せられ恭しく奉賀の祝辭を朗讀せられたり。退場後紀念の爲め二株の竹樹を病理講堂と内科講堂との間なる空敷地に植ゑ我皇室の無限に榮ゆかんと祈りて一同 兩陛下、皇太子殿下、皇太子妃殿下、皇孫親王殿下の萬歳を三唱して退散したり。

●雜誌部編輯會 は四月二十三日午後第一時より眼科教室に於て開會せり。

●本會入退會者 左の如し

▲入會 通常會員

内田 龍三

▲退會 通常會員

天野 一 啓

沖 一 靜

關 源四郎

野 村 秀 一

長 濱 義 雄

杉 森 久 治

淺 井 俊 介

加 治 遠 平

川 口 熊 夫

松 井 鏡 五 郎

小 林 三 郎

三 谷 彰 三 郎

\* \* \* \* \*

## 通 信

●松原三郎氏の通信 (三月廿四日發)

(通信)

(前畧)去る三月二十一日春季皇靈祭を卜して神

田富士見樓に同窓會を開き今度洋行せらるゝ田

中正鐸氏送別の宴と張り申候會する者田中正鐸

小林廣兩氏を始め殆んど二十名に及びたり幹事

田上涉君開會の辭を述べ祝電を披露す次で田中

氏謝意を陳じ且既往履歷に遡り往時の學術界の

状態、學藝進歩の趨勢、幼年時代の性行、修學

の經驗、立志の經過、留學の企圖等と陳じ其既

往の忍耐せる苦學と現在の旺盛なる雄志と未來

の確乎たる抱負といふ大會者の胸裡を刺衝し其

理想を鼓舞したり、一同杯と擧げて田中氏と吾

同窓會の萬歳を祝し互に相汲み相談じ和氣洋々

歡樂と盡して散會せり、時よ駿臺の聖鐘響くこ

と九點。當日宇都宮の渡字貞君遠く來會し足尾

銅山の田代保二君祝電を寄せらる。田中正鐸氏

三月二十三日丹波丸に搭じて横濱を出帆し遠く西行の途に上らる、氏別に臨んで曰く余若し生命だにあらば明年八月頃歸朝して再び諸君と相見へんと意氣大ふ昂る。

此次の總會は主事及諸教授諸氏の上京を機とし且歸朝者野田忠廣氏の歓迎を兼ねて來る四月櫻花爛熳の候を期して開く可き積に御座候。

今度新ふ十全會へ入會と申込まれたる在京會員は左の二名を御座候。

小栗熊次郎君(二十二年卒業)皮膚梅毒科撰科

山田孝太郎君(二十四年卒業)皮膚梅毒科介補

第二醫院燒失に付金子眼科介補、吉田高田外科

介補と共に第一醫院に出勤勉學中あり濱口君は

河本氏宅にて眼科研究の傍ら病理教室にて病理

學研究中あり

辻岡律君の大學皮膚梅毒科介補を止めて専ら吉原病院へ勤務中。(後略)

●横山軫氏の通信

(一千九百九十年十月二十日倫敦發)

左に掲ぐるは在倫敦同氏よりの通信として松原三郎氏の手を経て本會に到達せしもの也、紙面の都合により特に只其一部分を萃載せる而已。

○倫敦に於ける蠟術

小生は倫敦醫學院に入り先驚きざるは蠟術むしろそは彼の寫眞は物の眞と寫すのみにて此の蠟術こそ物の眞を像ち造り得るものなればあり該術は蠟質を以て凡ての眞形を造り而して硬化するの法あして當地に於ける斯術の元祖は一千八百〇二年 Madame Tussaud とて瑞西の婦

人がアイルランドに渡らんとて航海中難船し、  
る儘當地に上陸し其妙術と傳へたるものと聞け  
る。該術を一汎社會にも美術として實に重寶な  
る如きも特に我醫界は於て之重要欠く可からざ  
るものあり彼の博士や學士が多年刻苦して書け  
る解剖圖書は最早此一婦人の技術に壓倒せられ  
さり即ち當地の醫學部に之該術を利用し實に鮮  
明に身体組織病變等を遺憾なく現はしあると以  
て又一人の解剖圖書を携へ居るものを見ざるに  
至れり特は近來之技術者は醫士より出たると見  
ぬ驚く可き緻密なるものを運び來て申候我醫界  
も該術を修めたる一士と希望の至お不堪候  
○英國乃醫術と醫界並獨逸の醫界との關係  
英國の醫術は佛國の醫術に對し夫婦的の關係あ  
るものゝして獨逸の醫術は蓋し此兩國より産れ

出たる若者なるべし如何となれば此兩國の醫術  
の歴史が印度や埃及や希臘や羅馬の古代より系  
統するものにして而して實に現時醫術の主要も  
亦此兩國の醫界の功に歸すべきもの多ければな  
り見よ彼黴菌や種痘の發見と云ひ防腐消毒の發  
明と云ひ又外科的多くの大法と云ひ皆兩國醫界  
の專有に非ずや然りと雖も之より産れ出たる獨  
逸の醫術は其科學の進歩は於て最早兩親より遙  
に奥域お達したる事も蓋し間違なかるべし凡そ  
現代お於て斯學の奧妙の域を究めんと欲するの  
士は獨逸の醫術を視ざる可からざされど英國の  
醫界を窺ふも亦得る處あるべし何となれば英國  
の醫界は其醫術を實地に應用する点に於て未だ  
其親たるの品性を失はざれりなり  
諸君驚く勿れ英國の醫學修業は五ヶ年として其

授業料は一千六百圓此巨額なり(大學お於て)然らば英人は如何なる利益と希圖して斯る長年限と又世界に比類なき巨額の授業料とを投じ此醫術を脩めんとするかと吾人の疑点ならずや而して此疑点を解かんと欲せば英國の醫界と見るの必要起る

英國の醫術は進歩の鋒先稍鋭ならざるが如しと雖も之と一國に應用し妙理の間に國民の團欒と種族の繁榮とを療衛するの点に於てと蓋し世界に比類あらざるべしそは地圖と披き歴史を繰るならば自ら明ならん見よ彼の掌大の英國より近々二三百年の中にして南北亞米利加の種族を分ち亞非利加澳太刺利亞にも其他世界各國も優勢ある彼等種族細胞を播き散らし尙ほ獨り英人の体格が累代進歩の道と取て來りしと云ふとを注

意するに於ては再ひ贅言を要せざるべし

英國の醫界は其術を善長も應用し得るの國民が醫術の徳と誠も明かに知るを以て也即ち自國の文明が此醫術により導き來り又進み行かんとするを明に知り得れば也されば英人の間には學者として術者として神聖の尊威を完ふし得るものは彼の醫士の右に出るものなき事は英語の初學に於て學びたると正に相違なかるべし英醫の彼の侯伯子男を貫く勢あるのみならず其俸酬も莫大なるものありろは小生の出席し居る學校の立關の揭示と開業醫の狀況によりて察知ると得べし

揭示 當病院お於て當部卒業の醫士を募集す  
ヂナナリア(卒業はやくの意味)年俸七千圓  
シンナリア(稍熟練したる意味)年俸一万圓其

他新鮮なる床と日々の食餌とを供す志望者へ  
申出づ可し

開業醫診察料手術料一回に付十圓より二百圓位迄とす下級開業醫（プリア醫士）なるものあり之は一回五拾錢位めて應診すプリアクトルの外は何れも二頭立の黒塗馬車と飛ばし居候、只今下宿の老母が診察料五拾圓を拂ひたる醫士の受取書と見せ呉れたり斯く下宿屋迄にても然るものなれば日本人よて英國の醫士の高價なることを知らせして診察と受るふ於ては後めて驚かざる可からず過日も或人の談に一年程前に日本人よて本國風に高うくと或ドクトルと招き診察を受け扱て其診察料要求の爲遂に身を隠したりと云ふとと聞けり併しプリアドクトルか或の宗教に關係ある醫士の決して然る事なく其他凡て乃

病院の無代價なり即ち諸外國人も同じく慈善の徳を受くるものとす併し慈善病院よて紳士の行く可き處にあらざる可し

英國の醫術と醫界の有様大要如此然らる前項の疑問釋然として了解され得ると共よ又羨望の至らざるや而て彼等今日の榮あると彼等か與りて最を功あるアングロサクソン民族が絶世の優勢を極め又世界に擴播したると共に従ふて彼等の需要が實に擴大に至りたるの結果なることを切に思はざる可あらざる可し

彼乃鑽々として進歩の鋒先を爭ふ戰國的獨逸の醫術お至りての固より自界の圓滿を完ふし得ざるのみならず未だ一國の完きよ尽すの暇なるるべし嗚呼倭民族の發育と優勢とを司ふんとする我帝國の醫界は今如何の道を涉して可なる可き

(公文)

ヤ (以下次號)

\* \* \* \* \*

公文

●勅令第二十四號

文部省直轄諸學校官制中左ノ通改正ス

第一條第項中「第六高等學校」ノ下ニ「第七高等學校造士館山口高等學校千葉醫學專門學校仙臺醫學專門學校岡山醫學專門學校金澤醫學專門學校長崎醫學專門學校」ヲ加ヘ同條第二項ヲ削ル

以下略ス

●勅令第二十五號

明治二十六年勅令第八十七號中左ノ通改正ス

以下略ス

金澤醫學專門學校

校長 一人

教授 十三人

助教授 五人

書記 五人

以下略ス

附記

本令施行ノ際第一高等學校第二高等學校第三高等學校第四高等學校第五高等學校職員中醫學部ニ勤務スルモノニシテ別ニ辭令書ヲ交附セラレサルモノハ現官等ニ相當スル各當該醫學專門學校職員ニ任セラレ現ニ受クル俸給額ニ相當スル俸給ヲ給セラルモノトス

●文部省令第八號

第一高等學校醫學部ヲ千葉醫學專門學校トシ第  
 二高等學校醫學部ヲ仙臺醫學專門學校トシ第三  
 高等學校醫學部ヲ岡山醫學專門學校トシ第四高  
 等學校醫學部ヲ金澤醫學專門學校トシ第五高等  
 學校醫學部ヲ長崎醫學專門學校トス  
 第三高等學校法學部及同工學部ヲ廢止ス  
 此ノ省令ハ明治三十四年四月一日ヨリ施行ス

## 會 告

### ● 寄贈書目

濃飛醫學會雜誌	第一	同	會	日本助産婦新報	第三	同	會
日本醫事週報	第三六七八九〇一、二、三、四、五	同	社	中外醫事新報	第五〇、三、四、五、六	同	社
臺灣醫事新誌	第三卷一、二、三	同	社	東京醫學會雜誌	第五卷四、五、六、七、八	同	會
日本眼科醫會雜誌	第五卷二、三、四	同	會	藥學雜誌	第三八、三〇	同	會
				廣島醫事月報	第三六、七、八	同	社
				醫事新聞	第五四、六、七、八	同	社
				大日本耳鼻喉科會々報	第七卷二、三、四	同	會
				公衆醫事	第五卷二、三	同	會
				獨逸語學雜誌	第二年 六、七、八	同	社
				助産ノ栞	第五七、八	同	會
				醫海時報	第三五、二、三、四、五、六、七、八、九、〇	同	社
				岡山醫學會雜誌	第三三、四、五	同	會
				教育公報	第四	同	會
				京都醫學會雜誌	第二六、九	同	會
				東北醫學會々報	第一九	同	會

(會 告)

成醫會月報	第三六	同	會	一高志林	七	同	會
藝備醫事	第五八九	同	會	東京市教育時報	七	同	會
政教新聞	每號	同	社	研瑤會雜誌	四	同	會
產科婦人科雜誌	第三卷三四	同	會	大坂醫學校々友會雜誌	三	同	會
衛生談話	二三	同	會	胃腸病研究會々報	第三卷三四冊	同	會
國家醫學會雜誌	一六七八	同	會	皮膚病學及泌尿器病學雜誌	第二卷二	下平教授	
學士會月報	一五六七八	同	會				
福井縣醫學會雜誌	四三四五	同	會				
北越醫會々報	二三	同	會				
二十世紀醫事	三四五	同	社				
東京醫事新誌	一九六七八、九、一〇〇、一一	同	局				
軍醫學會雜誌	二七八	同	會				
齒學研鑽	二卷三	同	所				
北辰會新誌	二元	同	會				
井上同窓會々報	二四	同	會				
眼科							

●會費領収

一金壹圓 (自十號) 五錢 至十六號) 不足 喜多外太郎君

一金壹圓 (自十三號) 五錢 至十九號) 不錢 齊藤 幸作君

一金壹圓八拾錢 (自十四號) 至廿五號) 小倉加一郎君

一金壹圓五錢 (自十七號) 至廿三號) 太田 精一君

一金參拾錢 (自十三號) 至十四號) 岡部元次郎君

一金七拾五錢 (自十七號) 室田下三太郎君 一金壹圓貳拾錢 (自十五號) 高口保太郎君

一金七拾五錢 (自十六號) 津川 恒君 一金壹圓五錢 (自十五號) 諸角 友平君

一金六拾錢 (自十五號) 澤 賢 吉君 一金七拾五錢 (自十六號) 加藤 慶三君

一金壹圓五錢 (自十六號) 森 川 修君 一金九拾錢 (自十五號) 川北 辰吉君

一金壹圓 (自廿九號) 深見貞之助君 不足五錢 一金貳圓拾錢 (自十三號) 沼田外太郎君

一金九拾錢 (自十二號) 玉崎 隆三君 一金壹圓五拾錢 (自十四號) 白井 精一君

一金壹圓卅五錢 (自十四號) 瀨尾順四郎君 一金貳圓拾錢 (自十七號) 榑 原 久君

一金七拾五錢 (自十五號) 吉川 砥直君 一金壹圓貳拾錢 (自十五號) 村田太二郎君

一金九拾錢 (自十二號) 井上 鍬吉君 一金七拾五錢 (自十八號) 松井梅次郎君

一金壹圓五錢 (自十六號) 米村吉太郎君 一金貳圓 (自十二號) 辻 岡 律君

(會 告)

充

一金壹圓五錢 (自十四號至二十號)

島田吉三郎君

一金九拾錢

(自十七號至廿二號)

山田幸太郎君

一金壹圓五錢 (自十四號至二十號)

新谷 信吉君

一金九拾錢

(自十七號至廿二號)

小栗熊次郎君

一金壹圓五錢 (自十五號至廿一號)

高田 範國君

一金九拾錢

(自十七號至廿二號)

松原 三郎君

一金壹圓五錢 (自十六號至廿二號)

北 豐 吉君

一金四拾五錢

(自十五號至十七號)

杉本 悅敏君

一金壹圓五錢 (自十七號至廿三號)

中川 幸庵君

一金壹圓五錢

(自十七號至廿二號)

橘 左 內君

一金壹圓五錢 (自十七號至廿三號)

大塚 正一君

一金壹圓五錢

(自十七號至廿二號)

一金九拾錢 (自十六號至廿一號)

生沼 曹六君

一金壹圓五錢

(自十七號至廿二號)

吉田 幡誠君

一金九拾錢 (自十七號至廿二號)

吉田 幡誠君

一金壹圓五錢

(自十七號至廿二號)

笠間 太作君

一金九拾錢 (自十七號至廿二號)

金子太須計君

一金壹圓五錢

(自十七號至廿二號)

金子太須計君

一金九拾錢 (自十七號至廿二號)

金子太須計君

一金壹圓五錢

(自十七號至廿二號)

金子太須計君

